

戦記

-父と母に-

松崎一平

7

娘の話聞いたあと、満開の桜の木の下を流れていった死体のことがずっと頭から離れなかった。なぜそんなことが起きたのか、気になってしかたがなかった。だが、この土地のいまの状況からすると、警察が捜索して、見つけたしたら死因を探るといった対応はおこなわれるはずもない。住人のひとりひとりが、日々の身の回りの生活に追われているし、もちろん地域のマスコミも、役所すらも、ほとんど機能していないのだから。流れていったさきことは、自分で調べるしかない。夜、床に入ってから、娘が話してくれた光景が遅くまで頭を離れず、明日になったら南川の河口に行ってみようと思い、明日の一日の段取りを考えているうちに、いつの間にか眠り込んでいた。

翌日、天候に恵まれたこともあって、わたしは庭の畑の世話をすませると、朝の仕事で忙しくしている妻に、南川の河口の方まで歩いてくる、と告げて家を出た。花冷えといってよい、肌寒い午前中。家からしばらく行くと川筋に沿って堤防脇を走る道路に出て、河口に向かって歩く。住宅が立て込んでいる地域では、ときどきひとに会いもしたが、次第に小規模の工場が増え、それらのほとんどが休業状態で、わたしのほかに歩いているひとはいない。いくさが始まって以来、自動車が通ることはきわめてまれなため、自分のペースで、歩きたいところを歩く。道路の左手には南川の土手が走り、道路を通っているかぎり、それが視界をさえぎっていて、川の光景を見ることはできない。満開の桜の木の上部分が、土手越しに見える。しばらく行くと、道路から土手にあがる階段があり、金属製のパイプで造った手すりにつかまりながら、階段をのぼりきると、土手の上の細い道に出て、河口が近づいて幅の広まった南川の流れが目に入る。この辺りになると桜はもう植わってはず、こちら側の岸辺に、丈の低い、細い枝が茂る木が目立つようになる。大気の肌触りが、川の流れの冷たさを類推させて、川面からそよ風が吹くごとに、首の辺りがぞくっとする。川の流れに沈みそうな狭い砂地のところどころに、何羽かの青鷺がじっと立って、獲物を待っている。微動だにしない青鷺たちの眼の前を流れる死体。近くで見たなら不気味に感じるにちがいない、青鷺たちの瞬きしない眼は、見えるはずもない距離を隔てているものの、昨日もそんなふうに狩りをしていただったら、流れていく死体を見たかもしれず、なにか不思議な気がする。

河口が近づくとつれて、向こう岸の、さらに向こう側に北川が見えてくる。むろん、山脈をうがって流れてきた北川の方が、川幅も広く水量も豊かだ。南川は北川の河口付近で北川に合流し、一筋の流れとなって海に注ぎ込む。河口には橋が架かっていて、海岸線に沿って国道が南北に走っている。南川沿いの道路もその国道に通じ、いつの間にか北川のものともなる堤防は、その橋の下を通過して、海辺に至る。ミサイルで破壊されたままの港は河口および河口の北方にあって、汽水する河口に面した向こう側、つまり北側には、小さな漁船やプレジャー・ボートが係留してある。南川の川向こうの、北川と挟まれた地域は住宅が立て込み、公共の建物も集中し、この町の中心街となっている。河口のこちら側、つまり南側には、河口に向かって砂嘴が伸びており、かつてはそこにも松林が広がっていたという。南北に走る国道沿いに、いまは松ではなく、多様な種類の広葉樹が、国道に平行に幅広く、かつ密に植えられていて、その海側に遊歩道が、やはり国道と平行に走っている。その遊歩道の海側にコンクリート製の塀があり、一定の間隔で階段があって、砂浜におりることができる。そこは、干潮のときには潮干狩りができる、海水浴場を兼ねた海浜公園になっている。流れてきたはずの死体については、なんの情報も得られず、わたしは今度は、海風の冷気を感じながら、散歩するはめになった。

わたしがこの土地に住むようになって一年足らずの頃のこと。わたしのおぼえているかぎり、出不精といたくなるくらい旅に出ることなど滅多になかった父が、母と一緒にひょこりと訪ねてきた（父が来たのは、一度きりだった）。父を案内して、この辺りの海辺を歩いたとき、父は自分が育った土地とよく似ていると、とても懐かしそうな、うれしそうな声で、わたしに告げたものだった。その頃、父はまだ、北陸に住んでいた。わたしが覚えている、その時の父の話。

おまえが小さいころ、夏休みにおじいちゃんのうちにいったときに、浜辺で泳いだり、波止場で魚釣りをしたりしたけれども、わたしが子どもの頃までは、あの辺りは、戦国大名が防風林として植えたという伝承のあった、それは美しい松林が湾沿いに北に向かって続いていて、おとなでふたかかえもみかかえもある大木が、何本も植わっていた。小学生の頃までは、松林や、松林の中にある神社の境内で、よく遊んだものさ。小さい村で、それほど子供の数が多くなかったから、人数が足りないので、三角ベースの野球をしたり、夏休みには蟬を採ったり、探検と称して、普段は行かない場所をのぞいたり、かくれんぼをしたり、ほんとうにいろんな遊びをして過ごしたものさ。松林の向こうには遠浅の海岸が広がっていて、干潮のときにはあさり採りを楽しみ、潮溜まりで小さな魚な蟹をつかまえた。あるいは砂遊びをして過ごしもした。いま思うと、子どもたちにとって、いわば王国だったな。ほんとうになつかしいし、正直に言って、もどれるものなら、あの頃にもどりたいよ。年を取るほど

に、そう感じるよ。そこで、みんなでまとまって何かをすることの難しさや、何かをやりとげたときの楽しさを経験したものさ。けんかをしたり、仲間はずれにされて悔し涙を流したり、少し気持ちや体力の弱い子に意地悪をしたり、されたり、ほんとうにいろんなことを経験したな。友だちにとって、わたしはわがままで生意気な、きっと嫌な子どもだったと思うよ。遊んでいて、いつも不思議だったのは、大きな松の木、ちょうど腰をかかめると目の前にくるくらいの高さのところ、両側から斜め下に向けて、大きな矢の羽のような形に、鋭いナイフの刃で何本も溝が刻まれていたこと。戦争の頃、燃料にするために松やにを採取した名残とのことだったね。おじいちゃんが、そう教えてくれた。無惨な爪痕といった感じで、子どもごろころに、松の木がかわいそうな気がしたな。もっとも松林には独特の香りがあって、つまりは松やにの香りだが、その清涼感が、ぼくら（と、父は茶目っ気たっぷりにいった）の王国にふさわしい気がした。わたしは、中学校と高校は、朝早く家を出て、自転車と国鉄を乗り継いで、一時間以上かけて県庁のある街まで通っていたので、家に帰るのは夕方六時を過ぎることが多かったが、帰宅して制服を着替えると、浜辺に出て、裸足になって、石投げをしたり、石を投げて波切りをしたり、棒切れをバットにして石を海に向けて打ったりして、遊んだものさ。それが何よりも気分転換になって、学校で経験した不愉快なことを忘れることができた。その頃は、もうすっかり松林は枯れて、かわりに杉を植林していた。全国的に松が枯れていった時期のことだ。松食い虫のためと聞いたことがあるが、ほんとうはどうだったのか。ちょうどその頃のことだ、市に工場を誘致するために、遠浅の海岸を大規模に埋め立ててしまっ、海がほんの一部を残して滅びてしまったのは。おまえたちが小さいときに海遊びをしたのは、その、ほんの一部。結局、村の辺りまでは埋め立てたものの、工場を、予定したようには誘致できず、村の埋め立て地は埋まらなかったし、もう少し先まで埋め立てる計画もあったようだが、実現できなかった。それで、ほんの一部にすぎないけれども、あのあたりの浜辺や磯は残されたのさ。

「ぼくらの王国」という父の、予想外の言い方が印象深かったこともあって、この時の話は、三十年近く経った今でも、よくおぼえている。声の表情も含めて、ほんとうによくおぼえている。そこは、父が生まれた村が面していた小さな湾の東の端になる岬のところで、高さ二十メートルほどの海岸段丘が瀬戸内海に張り出しているのだった。沖が埋め立てられた際に護岸工事の一環で、埋め立て地とかつての浜辺の間を掘削して新たに設けられた船舶まりを守るために、五十メートルほどの防波堤が岬から沖に向けて造られる以前は、干潮時には砂浜があらわれて岬の向こうに渡れるのが、満潮時になると、岬の向こう側に行くには岬の上の細い柚道を通るしか手だてはなかった、と父から聞いたことがある。わたしの子ども頃には、すでに岬の崖はコンクリートで固められた地面にそそり立つふうで、地面のもう

一方の端の岸壁が船泊まりとなり、その東端で岸壁からほぼ垂直に防波堤が沖にほぼ垂直にのびていた。その防波堤の向こう側には、外海から打ち寄せる波が砂を運ぶために砂浜がわずかに残っていて、そこに父は、わたしや姉や妹を連れて行き、海遊びをさせてくれたものだった。ときに母も一緒だったが、日差しを避けて夕方を選ぶことも多く、その時には母は、食事の支度のために家に残った。姉や、まだ小さい妹との磯遊びは楽しかった。八月も半ばになると、海水が冷え始め、クラゲが現れる。一度、水の中に入るのが大好きだった妹が刺されて、大泣きしたことがあった。両親があわてるやら、妹のべそかき顔をみなでおかしがるやらで、大変だったな。まだ幼稚園に入る前の妹の幼い右足の裏の土踏まずのやわらかい皮膚に、蚊に刺されたような、赤い小さな腫れが三つあった。海水でふやけて白ずみ、しわができた皮膚の、赤い三つの丸い腫れ。

そんなことをなつかしく思い出しながら、わたしは砂浜を、河口から遠ざかる方向に歩く。年齢も近く、仲のいい妹とは、いくさの前も、遠くで暮らしているために滅多に会うこともなく、用があると電話で話すくらいだったのが、いくさが始まってからは電話も不通で、手紙のやりとりもできない。親しい家族ともまったく交流できない、この、おそらくはひどく異常な事態にすっかりなれてしまった自分に気がついて、歩きながら、強い恐怖を感じた。沖に流れてしまった可能性が高い、昨日、娘が見たという若い男の死体は、いったいどこから流れてきたのか。家族は知っているのか。この土地の者か。それとも山脈の向こう側からやってくるときに、なにかごとかがあって、殺害されてしまったのか。この土地でも、いよいよ戦闘が始まるのだろうか。問いを重ねているうちに、かつて父がよろこんだ浜辺は、わたしの中で生き生きとよみがえった「ぼくらの王国」は、もろくもついでってしまった。

そのとき、わたしが向かっている方角の木の植え込みの向こうから、わたしと同じくらいの年齢の男女が、ふいに現れた。二人は、波打ち際に沿ってこちらに向かって歩きながら、海のほうにしきりに視線をやって、心配そうに何かを探しているふうだった。

(この章、続く)